『竹取物語』に見る異郷への羨望

外国語学部　国際文化交流学科４年
小島　颯

はじめに

「今は昔、竹取の翁といふ者ありけり。野山にまじりて、竹を取りつつ、よろづの事につかひけり。名をば、讃岐の造となむいいける。」古典に詳しくない人でも、この一節は聞き覚えがあるだろう。日本最古の物語である『竹取物語』は、今なお簡略化された童話として、あるいは様々な分野での研究対象として受け継がれている。竹の中から見つけられた子どもが美しい姫に成長し、帝に見初められるも、最後には月に帰ってしまう。この簡単なストーリーの中に、いくつものテーマを秘めているのである。

本文では、『竹取物語』に見る人と異郷との関係を主題として、二つの視点から物語を見ていく。ひとつは、かぐや姫の視点から見たかぐや姫の物語、もうひとつはかぐや姫の養い親である竹取の翁の視点から見た竹取の翁の物語である。何故二人は地上で出会い、どのように時を過ごし、そして何故引き離されてしまったのか。月の世界の住人であるかぐや姫と地上の人である竹取の翁、この二人の邂逅がそれぞれに何をもたらしたのかを知ることで、人にとっての異郷というものが何なのかを推察していく。

1．異郷としての月の都

まず、前提として月がどのような役目を持つのかを定義していきたい。月は、日本はもちろん世界でも、古くから特別な意味を持つものとして信仰され、畏怖と崇拝の対象とされてきた。真っ暗な夜空に浮かび燦然と輝きながら、太陽とは違い一夜ごとに姿を変えていく。この満ち欠けに人は生と死を重ねて見てきた。新月から満月になり、再び細っていく様は、まさに人が生まれ、栄え、老いて死にいくまでの流れそのものである。しかし、月は例え針のように細っても、時がたてば再び満月に戻っていく。そのことから、人は月に対し、不死の願いを込めるようになった。『万葉集』の中に、このような一節がある。

天橋も 長くもがも 高山も 高くもがも 月夜見の持てるをち水 い取り来て 君に奉りて をち得てしかも（関根 P.126）

もし天へかかる梯子がもっと長ければ、あるいは山がもっと高ければ、月夜見の持つというおち水をあなたに差し上げ、若返ってもらいたいのに。日本神話の月の神、ツクヨミが若返りの妙薬を持っている、という考えのもとに詠まれた歌である。『万葉集』の中には他にも若返りの妙薬としてのおち水が読まれている歌がある。このように、月と不死は結び付けられてきた。

『竹取物語』の中では、この月には不死の世界があるとされた。月の世界の住人であるかぐや姫の語りの中で、その月の世界は地上とは真逆の世界として、「かの都の人は、いとけうらに、老をせずなん。思ふこともなく侍るなり。」（P.138）と描写されている。月の都の住人は、大変美しく、年老いる事は無いと言う。さらに、かぐや姫が月に帰る場面で「翁をいとほしく、かなしと思しつる事も失せぬ。」(P.150)、月の住人に戻ったかぐや姫は翁への愛情も別れの悲しさも全てなくしてしまったとあるように、月の住人は思い悩む気持ちを持たない。月の世界は美しく清らかで、悲しみも苦しみもなく、老いる事もない、完璧な世界として描かれている。つまり、月の世界を地上には存在し得ない世界、一種の異郷としたのである。

この異郷は、佐藤正英が著書『隠遁の思想』に書いている、人々が世俗世界を逃れたどり着こうとしているところ、世俗世界の対となる場所、原郷世界と同じものであると考えられる。彼は原郷世界を、

> 古代や中世のひとびとにとって、自己のすべての全きかたちにおける欲望が、或る長さの時間の経過内においてではなく、眼前において即時に、しかも少しの間然するところがなく十全なかたちで、現実のありようとしてもつことができる世界である。(p.78　l. 6 ～ 10)

と定義している。『竹取物語』においてかぐや姫の語る月世界は、まさにこの欲望が現実のありようとして満たされる、人々が望む理想の世界なのである。

この理想の世界は、『竹取物語』において神仙思想と硬く結びついているとも考えられる。神仙思想とは、不死の存在を仙人として、彼らの住む異郷に不老不死の楽園を見いだし、神仙たちを信仰すると同時に自身も神仙になる為の実践を求めようとする古代中国の思想である。物語の中で神仙とはかぐや姫達月の住人だ。そして彼らの住む仙郷こそ月であり、老いも死も憂いも悲しみもない原郷世界なのである。そしてその対として、地上世界は「穢きところ」(P.146) として描かれている。地上世界では人はいつか老いあるいは病気で死ぬ。悲しみや苦しみに苛まれ、常に物思いをする。ままならないこの世こそが地上であり、原郷世界と対立する世俗世界なのである。このことを前提として、月の世界＝異郷と地上世界の人々との関係を考えていく。

2．かぐや姫の物語

小山儀の遺稿に入江昌喜が考証を加えたという『竹取物語』の注釈書、『竹取物語語抄』には、かぐや姫は罪を犯して仙界から流されてきた仙人だと位置付けられると書かれている。罪を犯して俗世に流された仙人を謫仙人と言うが、かぐや姫を謫仙人として見ると、『竹取物語』は仙人であるかぐや姫が犯した罪を償う為に罰を受ける物語とも解釈できる。では、かぐや姫の罰とはなんだったのか？それは、神仙としての神性を剥奪され、人の身に貶められることで、人の苦しみや悲しみを経験することだと考える。かぐや姫が竹取の翁に見つけられ、成長し、やがて月へと帰っていく一連の流れは、かぐや姫が人間らしく成長していくことで神性を失うが、やがて罰を受け終えて再び神性を取り戻し原郷世界へと帰る過程なのである。

竹取りの翁がかぐや姫を見つけた時、かぐや姫は「もと光る」(P.8)、つまり光り輝く不思議な竹の中にいた。かぐや姫が居るところ「暗き所なく、光満ち」(P.10)、翁や媼は「心地あしく苦しき時も、この子を見れば、苦しき事もやみぬ」(P.10) という。人々の心を癒すその輝きこそ、かぐや姫の神性の証である。

また、神性とは異なるが、やがて成長したかぐや姫が、翁から結婚を勧められても決して受け入れようとはしなかったことも、かぐや姫が俗世のルールから外れた存在であることを仄めかしている。翁が「変化の人といふとも、女の身、持ち給へ」(P.18) ることを理由に、「この世の人は、男は女にあふことをす。女は男にあふことをす」(P.18) ること、つまり唯人ではなくとも女の身ならば結婚することは当然なのだから、そうするべきだ、と勧めた時も、五人の貴公子にそれぞれ無理難題を押し付けて退けようとする。結婚していずれかの高貴な男性と添うという、当時身分が高い女性なら願うようなことを、かぐや姫は嫌がった。さらには、後に書くように帝の使者の要求をもばっさりと切り捨てるなど、地上世界の慣わしをも拒否したのである。

その反面、手に入るはずが無いと考えて要求した贈り物を求婚者たちが持ってくるたびに、「いみじうなげかしげに思ひ」(P.38)、贈り物が偽物だと分かると「思ひわびつる心地わらひ」(P.50) と、ひどく嘆かしげに思い悩んでいたり、ほっとして気持ちが明るくなったりする場面もある。今度こそ結婚せねばならないかと物思いに沈み、結婚しなくてもよいとわかったとたんに打って変わって晴れ晴れとした心持になる。その感情の浮き沈みは、人の心さながらだ。人ならざるところを持ち

ながらも、同時に人としての側面ものぞかせているのである。

かぐや姫が人らしい一面をのぞかせる場面はまだある。五人の求婚者のうち最後の一人、中納言石上麻呂足は、かぐや姫から燕の子安貝を持ってくるように言われていた。彼は求婚者たちの中では一番身分が低いながら、他の求婚者たちと違い、かぐや姫の言いつけどおり本物の子安貝を求めて自ら赴き、手に入れるために自分よりも身分の低い人間の言う事も素直に聞く、なかなか憎めない人物である。結局彼は燕の子安貝を手に入れることに失敗して怪我をし、そのことを恥じて病んでしまう。日に日に弱っていく中納言に対し、かぐや姫は自主的に見舞う歌を送った。そのかいもなく中納言は亡くなってしまうが、このことを聞いたかぐや姫は「すこしあはれとおぼしけ」(P.102)る。僅かに気の毒に思ったのだ。五人の求婚者たちとのやり取りを経て、他者への哀れみの心を知ったのである。煩わしさを知り、他者への同情を知り、かぐや姫はだんだんと人に近づいていく。

求婚者全員を退け結果的に破滅に導いたことで、かぐや姫の評判はとうとう帝の耳にも届いた。かぐや姫の下に使者が送られるが、かぐや姫はこの使者との対面をきっぱり断ってしまう。「国王の仰事を、まさに世に住み給はん人の、承り給はでありなむや。いはれぬ事なし給ひぞ」(P.106)と使者は大げさに喚きたてるが、まさにその通りである。帝の治める地上において、その命令に背くことは異常中の異常だ。特に、帝に見初められて仕えることは、当時の高貴な女性にとって、この上ない名誉であり幸運なのである。しかし喜びはしゃぐ翁に対して、かぐや姫は「強いて仕うまつらせ給はば、消え失せなんず」「死ぬばかりなり」(P.110)と過激な言葉で拒否してしまう。宮仕えをするくらいならば、いっそ死ぬとまで豪語するほど、かぐや姫にとって結婚は忌むべきことであった。それは例え帝であっても。しかし、帝を絶対の存在とする地上世界に組み込まれてしまっている以上は、かぐや姫も今までのように完全に退けることは出来なかった。翁の手引きにより、帝はとうとうかぐや姫の姿を見ることに成功する。「類なくめでたくおぼえさせ給」うた帝は強引にかぐや姫を連れ去ろうとした。すると、かぐや姫は「きと影になり」(P.116)帝の腕から逃れた。「影」とは光のことである。かぐや姫は帝を前にして、初めて人ならざる正体を明かすことになったのだ。

「見る」という行為は、特別な意味を持つ。日本の神話にも、「見る」ことを結婚の第一歩と解釈できる例がある。日本神話の国産みにおいて、イザナギとイザナミはオノコロ島の上に柱を立て、お互いに反対から廻って出会ったときに国を生む。イザナミとイザナギの恋は、柱を巡って互いを見たときに始まるのだ。「目合い」という言葉が男女の交渉を意味するように、見ることは愛情を通わせる行為なのである。恋は「見る」ことに発し、相手を精神的にも身体的にも束縛する。帝はかぐや姫を「見る」ことで恋に縛り付けた。帝がかぐや姫を見た後、二人は手紙のやりとりをするようになる。結婚は拒んだものの、かぐや姫は帝を「憎からず」(P.120)思い返事を出し続けた。章の冒頭で、かぐや姫の地上での時間は、かぐや姫が神性を失いながら人として成長する為のものであると書いたが、帝と手紙を交わすに至って、かぐや姫は恋によって人として完成し、同時に神性を失ったのではないだろうか。

そうであるならば、かぐや姫にとって最大の罰は、別離の苦しみだ。三年の時が過ぎると、かぐや姫は月を見て「常よりも思ひたるさま」(P.122)普段よりも物思いに沈んだ様子を見せ始める。夜毎月に惹かれて眺めては、物思いに沈む。そんなかぐや姫を心配した翁が問い詰めると、かぐや姫は自分が月の住人であり、もうすぐ月から迎えが来ることを告げる。完璧な世界である月に帰る事は、しかしかぐや姫にとって「いみじからむ心地もせず、悲しくのみある」(P.130)、嬉しいとは思われず、むしろ悲しいことだ。かぐや姫は、月に人の心を持ったまま帰れないことを知っている。ゆえに地上で得たものを失いたくない、帰りたくないと嘆くのである。愛しいものとの別れは、最大の苦しみである。人の心を持ったかぐや姫にとって、それは耐え難いほど辛いものだ。だからこそ、罰なのである。

人としての苦しみを得たので、月の王は「罪のかぎり」(P.142)は償われたとして、かぐや姫を連

れ帰ろうとしたのではないだろうか。惜しみながらも、かぐや姫はとうとう天人によって羽衣を着せられてしまう。するとたちまちかぐや姫の人の心は失われ、神性が復活する。かぐや姫は「かぐや姫」から「羽衣を着た人」と作中での呼び方を変えられ、ただの原郷世界の住人に立ち戻り、地上世界を去っていってしまった。異郷からやってきた人は、罰を受けて罪を償い終え、全ての憂いを忘れて再び異郷に帰っていったのである。

3. 竹取の翁の物語

『竹取物語』のもう一人の主人公、それが竹取の翁である。翁の視点から見れば、『竹取物語』は異郷と地上の境目を歩む人の物語と考えられる。翁は何故境目に立つことを許されたのか。かぐや姫との関係性とは何だったのか。

翁についての情報は、冒頭から端的に示されている。

> 今は昔、竹取の翁といふ者ありけり。野山にまじりて、竹を取りつつ、よろづの事につかひけり。名をば、讃岐の造となむいいける。(P.8)

翁は山に分け入って竹をとり、それで細工物を作ることを生業としていた。その名前は、讃岐造と言う。讃岐は古代祭祀を司る氏族共同体である斎部氏とのかかわりが深い土地であり、竹取の翁もその一員の血筋だったのではないかという説は『竹取物語』の解釈において有力とされている (小嶋 P.10)。本論でもその説に基づいて話を進めていく。翁が竹を採る山という空間は、都から離れ地上の法から切り離された一種の辺境世界である。辺境世界は異郷と現実世界の狭間とされ、そこからは異郷を垣間見ることも出来るし、山から下りれば現実世界が待っている。狭間である「野山」での「竹を取りつつ」というこの行為は、神仙を信仰する上での一種の祭祀たりえるのではないだろうか。かぐや姫を迎えに来た月の王の言葉によれば、かぐや姫が翁の元に遣わされたのは、翁が「いささかなる功徳」(P.142) を積んだことへの褒美であったという。この功徳が、日ごろ山に分け入って竹を取っていた翁の祭祀のこととも考えられる。そうであればこそ、かぐや姫は竹取の翁の下へ送られたのである。

翁にとって辺境世界で出会った不思議な子供は、異郷からの授かり物に他ならない。大きくなってますます輝きを増すかぐや姫は、かぐや姫の物語の章でも述べたように、いるだけで光に満ち、心癒される存在だ。翁にとっては憂いのない理想の世界の一部であり、幸福そのものである。かぐや姫が翁のもとへ来たことで、翁は物思いから解放された。さらに、「節を隔ててよごとに、黄金ある竹を見つくる事かさなり」、「ようようゆたかにな」(P.10) った末、ついに「勢猛の者」(P.10) となった。実際の生活の上でも、憂いから解放されたのである。全てにおいて満たされたかぐや姫のいる暮らしは、翁にとってまさに原郷世界を垣間見ているようなものだったのだろう。

しかし、やがて翁とかぐや姫の関係に終わりが来る。翁はかぐや姫が年頃になると、積極的に結婚を勧めるようになる。全てはかぐや姫を娘のように可愛がっているが故だが、前章でも書いたように、翁の考える結婚と女の幸せは地上世界での幸せだ。それはかぐや姫にはあてはまらない、むしろ神性を保つ上では厭うべき行為である。そうとは知らずに、翁はかぐや姫という原郷世界の一部を、現実世界に組み込もうとしていたのだ。結果としてかぐや姫は帝との恋を成立させ、別離の苦しみを知ることで、心は地上世界の人になってしまう。再び神性を取り戻し原郷世界の一部に戻る時には、全てを忘れて完全に地上世界から切り離されるしかない。かぐや姫を失った翁はその後思い病んでしまう。半ば原郷世界を歩んでいた翁は、ついに地上世界へ転がり落ちていったのである。

4. 異郷と世俗

翁とかぐや姫は、わずか数年を共に過ごし、別れてしまった。『竹取物語』は二人の視点を通して、結局人は原郷世界には至れないことを示唆している。佐藤正英が原郷世界を定義した『隠遁の思想』で、世俗世界から原郷世界へ人が至ることについ

て語るところに拠れば、人は世俗世界から原郷世界に一挙に到達することは出来ない。辺境世界を通って初めて原郷世界に到達することが出来る。原郷世界に至る為に人は世俗から辺境世界へ出て行くが、限りなく世俗世界から離脱できても、辺境世界において人は世俗世界の内なる存在であることを完全にまぬかれない。(佐藤, P.80) 原郷世界に離脱することが出来ないのである。竹取の翁も、また辺境世界に身を置きながらも世俗世界から離れることは出来なかった。原郷世界の住人であるかぐや姫を得て擬似的な原郷世界を手に入れても、官位や結婚に関する考え方は世俗世界にしばられたままであり、老いにも死にも囚われたままである。かぐや姫を愛しもうとすればするほど、原郷世界を世俗世界の存在へと引き込んでいく。そうすることで、かぐや姫が人に近付いていったように、原郷世界は世俗世界に染まっていってしまう。それでは意味がない。かぐや姫でさえ人間の心を捨てなければ、原郷世界に帰る事は出来なかった。人は人である限り、世俗の中での自己を捨て切れないのだ。

まとめ

世俗世界と自身を完全に切り離すことはできず、けれど原郷世界に憧れずにはいられない。それが異郷と人との関係である。かぐや姫は、人を原郷世界に駆り立てる為に地上世界に落とされ、人々に悲しみも苦しみも老いもない完璧な存在というものを垣間見せた。しかしその原郷世界も、翁が結婚によって地上のルールに組み込もうとしてしまったことで結局ただの世俗世界の一部となってしまったのであった。原郷世界は一般化しようとすれば、世俗化してしまう。しかし世俗化しなければ、現実とはならないのである。では、竹取の翁がかぐや姫に連れられて月の都という原郷世界に行けば、翁は原郷世界を現実のものとして手に入れることができたのだろうか。答えは、否であろう。もし翁が月の都の住人となったなら、かぐや姫がそうなる事を嘆いたように、人の心を捨てなければならない。ただの名前のない「月の世界の人」になってしまう。「月の世界の人」は、人のように原郷世界を切望しない。そこに到達する喜びを、月の住人は感じ得ない。原郷世界が原郷世界たる所以、憧れを誘う理由は、人の心があってこそ。これは大きな矛盾だ。竹取の翁は月の都に行きたい。原郷世界を熱望している。しかし、幻郷世界には行くことはかなわない。行ってしまえば、原郷世界に到達したいという翁の心は、到達した喜びは、全て失われる。意味がないのである。翁は、どうしても世俗世界を捨てて原郷世界にたどり着くことが出来ないのである。

以上のことから、かぐや姫と翁とを巡る『竹取物語』は、世俗世界化して本来の意味を失うことでしか現実の事象となりえなかった原郷世界と、原郷世界に憧れを抱くようになりながらも、世俗世界から逃れることが出来ない人間との物語とも解釈できるのではないだろうか。人の異郷への羨望は絶えない。例え到達することが出来なくても、求めずにはいられない。あるいは、人にとっての異郷は、求め続けることにこそ価値があるのかもしれない。

一般註

『竹取物語』からの引用は、すべて雨海博洋　訳注　『竹取物語』(旺文社・1994 年) よりの引用である。引用文の文末にページ数のみを記した。

参考文献

小嶋菜温子　『かぐや姫幻想』　森話社　1995 年 11 月
佐藤正英　『隠遁の思想』　筑摩書房　2001 年 11 月
関根賢司　『竹取物語神話 / 系譜学』　おうふう　2005 年 5 月
高橋宣勝　『語られざるかぐやひめ』　大修館書房　1996 年 3 月
安藤重和 “『竹取物語』と神仙思想”. 愛知教育大学学術情報リポジトリ
http://repository.aichi-edu.ac.jp/dspace/bitstream/10424/4511/1/nihonbunka20514.pdf
岡崎祥子　”『竹取物語』研究”. 岩手大学リポジトリ
http://ir.iwate-u.ac.jp/dspace/bitstream/10140/3387/1/gg-v14p12-20.pdf
ルカ・カッポンチェリ　”東西の古典における「見る」ことの呪性と恋愛”　大東文化大学リポジトリ
http://www.daito.ac.jp/file/block_28771_01.pdf